

検査の合間で余暇の過ごし方

岩本友則

国連大量破壊兵器廃棄特別委員会（UNSCOM）の査察活動に係わってイラクに滞在中、どのような余暇の楽しみかたがあったのか、お話ししたいと思います。その過ごし方は、所属する査察チームによって異なります。彼らは、ジョギング、ホテルのプールで水泳、ダウンタウンでのショッピング、衛星放送によるテレビニュースなどで、気分転換を図り、また、休日（金曜日）は、観光もする事が出来ました。

しかしながら、インターネットは、完全クローズ世の中の情報を得るには、衛星放送だけ、また、イラク外への連絡手段は、国連の衛星電話のみで通話代は自己負担です。しかも、電話が許されるのは、家族への電話だけであり、会社や政府等の組織への電話はNGだったのです。

1. テレビ観戦で国籍が

私の滞在当時、サッカーワールドカップが開催されており、国連関係者は衛星テレビ観戦でワールドカップに熱中したのです。いつもならCNNのニュースしか流れていないのに、この期間中はサッカー一辺倒です。しかし、開催国フランスとイラクとの時差も手伝って、多くの査察官が深夜、明け方近くまでサッカーに熱中したものですから、翌日の査察活動は、観戦の疲れで結構大変そうな査察官が多くいたのです。サッカー観戦の姿を見ていると、話さなくても国籍が分かるのです。そして、彼らの会話はサッカーの話ばかり。

2. 事務所でパーティー

娯楽、憩いの少ないイラクでの査察官達のために、月に2回程度事務所でパーティーが持たれました。パーティーには、ピザや酒（ワイン、ビール、ウイスキー）などが振る舞われ、異様に若い格好をしてディスコ風に踊る女性達、国際交流の場なのです。ただ一人の日本人であった私は、珍しかったのか多くの国の人から話しかけられました。楽しい会話から最後は、日本及び日本人に対する苦情です。何故、日本人は、こうした国際プロジェクトへの参加者が少ないのか？ 国際貢献と言う意識は日本人にはないのか？ 何故、湾岸戦争に参加しなかったのかなどなど・・・世界の人達から批判を受け続けたのです。

しかし日本は、戦争には参加しなかったものの湾岸戦争に多くの国家予算を支援のために使い、また、UNSCOMの査察活動のために、金銭的支援及び活動に使う車の大半を提供していたのです。

こうした多くの協力をしているにもかかわらず、世界の人々は、日本及び日本人に対して痛烈な批判ばかりです。自衛隊の海外派遣でさえ揉める日本、世界から見れば不思議に映るようです。

パーティーも進むと任期を終え、帰国する人達に対する表彰式（感謝状の贈呈式）が行われました。感謝状が贈られる人達は、3ヶ月以上イラクで働いた人達に送られます。私は、2ヶ月と少しでしたので、感謝状を受け取る対象者にはなれませんでした。

2. スークショップ（骨董品街）

バグダッドには、スークと呼ばれる骨董品街がありました。多くの国連関係者が休日、スークを訪れる事を、楽しみにしていたのでした。写真は、スークの店の一つです。

これらの店の裏には、作業場があり、品物を古く且つ高価に見せるための処理を行っています。

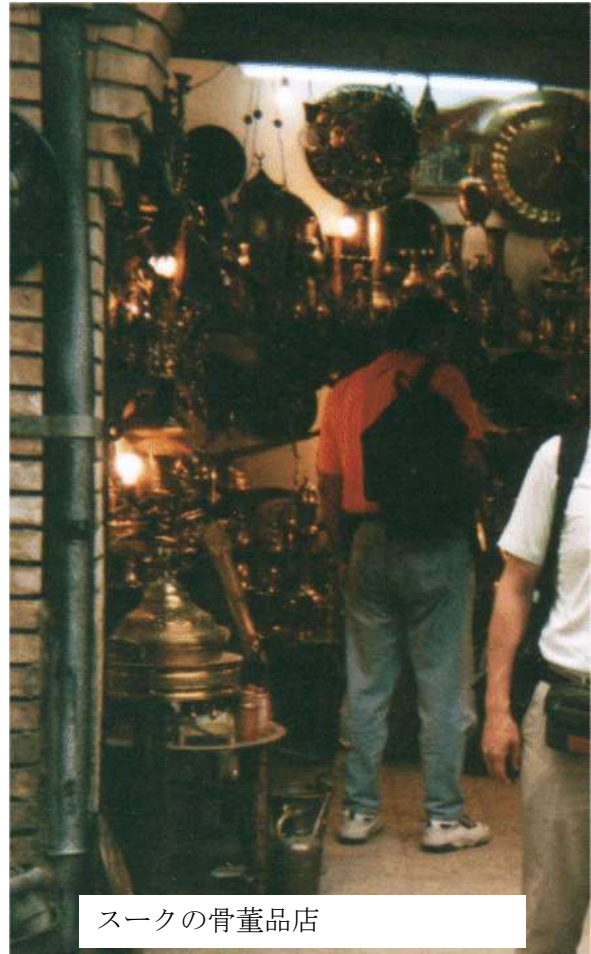
品物は、ペルシャジュータン、カーペット、金・銀製品、ガラス細工、時計、オルゴール、陶磁器等さまざまです。

これらの中には日本の九谷焼など高価な陶器もありました。また、クエート侵略時の略奪品ではないかと思われるような品物もありました。

価値のない品物を、いかにも価値かつ歴史があるように説明するスークの店員との会話は、楽しいものでした。例えば、これは、16世紀の品物だと言って渡されたものをよく見ると、1946年インド製と書かれているではありませんか！それで、本当か？と聞きますと、彼は、確かだ200%確かだなどと自信を持って答えてきます。しょうがないので、あなたは、英語が読めますか？と聞くと、もちろんと答えてきます。それで、書いてある所を、指さします・・・とこんな調子です。

こうして国連関係者達は、こんな会話をしながら、価値ある品物を見つけ、買って帰ろうと、たびたび足を運ぶのです。

スークの骨董街の奥には、千年以上前の古いバグダッドの町並みがあるのです。



スークの骨董品店



続く